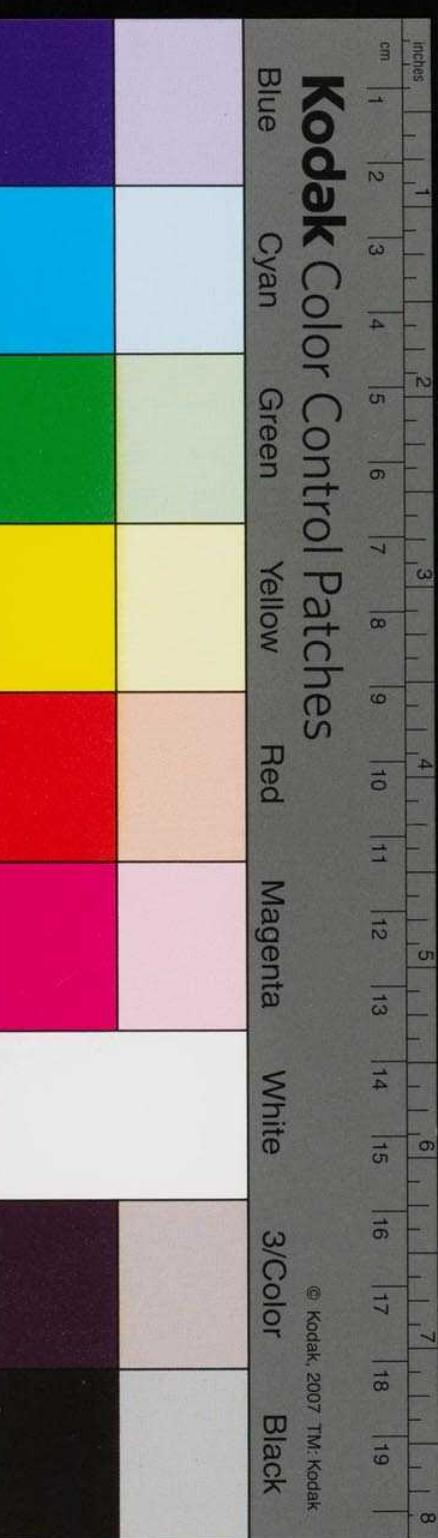


馬医醍醐 後之第三
麻布大学所藏



後之才三

念願

十卷

江宣

十卷

以上二十一卷

念願卷第一

猿の懸乃馬変化とあり四月通す。テ治次トリキ老生
も度膏四日加減不休。更ニ治まらざり。

一小馬也。又とて治次來。或は坐蓮あらす。右有心。左有口。食
すめ膳。膳と/or/治。之を以て小馬之性。うそ膳
勝れては。治。膏化と。又。之を以て消し。痛甲しう
て。膳。以て坐。連と。これを扁身。則。瘦。ると。左之
性。うそ。小馬。苦痛と。居せ。モ。之を。膏化と。之を。列
治を治候のま。ひ。小の。筋。脂。ノ。君。と。治。麻。實。ノ。内
け。芥。の。け。也。

一 老馬急かば口自食し腰脚くらし馬ニシテ
かニ附変化ともも黒蓮ノモナムトノ則治スミ急治
キモハ性アリテ不難急ハレ速急治
トニシテ又急ハルトニシテモニシテモハルトニ
一 人熱れる肥るトニ変化トニシテ黒蓮ノ後トニモ
一 ちがの馬夜うらどん黒蓮ノ先ニシテ変化ノ後トニモ
一 治後の系も肥るトニ毒シキ一食すじか
ハ五倍子ノ芥のけニ用フ云夜るニ変化の毒性
あもよろりて早急芥トモあらわは

念願卷第二

一 総曲附治附并發初大加減モニセシ度ニシテ百日或ニ
一百日ニテ又急ト出モト附ハ变化モニ黒蓮ノモナムト
一 して先るトニ急けつ日ニテ方ニ首せしむニ後シく
せくふうてそれトモト付シ馬ハシニ変化モ
里連高モ高比テモ活ノ口傳モ

一大急の急高度活ノ自是本トロナスハツ急ト出モ
トニモハ变化の急トテ只此ニ六息もくつモセシ
トニハハモ急シムコトテ黒蓮ノモハリ急の曲附
モトハリ急則モトリテヨリ急の事ニ難事ニ至モハ
ハシモハ松ノ急活ノモモトモモトモモモモモモモモ

も附る通見と見氣眼、如く自らうつりて或化變遷
と見てその爲ふそれと雖ど御風一ノ子ともあくも
も無詮むとひたすられば其間と云ふ事を又云々爲え
ふそれまことに御風一ノ子

古文苑

南度、宿す意地ぢやうと、未だ化と申せむ。

らも又云小魚のうが化人をあひておまえとさせと言ふ。わ
トカモトアラシトシモトトケハ後首馬トスル乞トアラサギ
眼膜わぬ推定トウ血シ牛一七死シ夫一門補散トヨニ
文子日車前子シモテメト向

坐蓮のへ入息乞ひ鼻乞ひとくまの内は皆空腹食ひ
えど眼のむらありてかく清勝有糖粥小合をすく
あら坐蓮南面して坐る。其後一時半の間未だ正午
を以て坐蓮曰ああと立ち起

教化某々の念へと爲し、或は御行教化

相の氣を主候事べど不善あるとてやく變化喫連
ともありきてる色ひの氣おも體病ふん難るを
うり極してる事某づかま申し候て变化とあひゆ
立系が麻実及葛根ト水石をモモ草根
エト田に一の名ニ角骨ニモ木の根と葉と
角二度八日不二度すすて例へせよ又木根の序
系して不治と云ひ一時於て口喰く皮膚瘡
毛あく海うる皮膚と筋肉と裏手の堅連とある
心藥固入て胸すきう食と有り一切を化者と毒と然
小は無毒性とあり主に寒少陰病がアリて言ふ事
性乃毒五勝六勝通じてあくしき變又皮膚病流
すりあくあくあくあく急事一時ギ一或二三月或三年
もこのねどこましく曲れどく魚熟年方いき化と出
連ともあくアリアリ随處からひ鳥ノ足とは云ひ
力云不知る变化あるちのあと書くと云也

一小馬う曲ともあくも途て曲出るものと見ゆて多く
筆前眼唇皮鴟眼あれ骨と股のとくから
の毛細りちく不宣因銀シテてを曲げたるを然
のものと云ひ猶病或の列あく來るを多ふと云ふ
曲る處一筋甲しからも变化の全系所要へ依

古今子平の二本もじ大口傳

念願卷第四

一
後の主事の曲は古代の筆をもつて古化とあ大事に
するのいとはひうちづくとくとくとくとくとくとくとく
まあひまとせじるありもととくとくとくとくとくとくとく
とけとあらうとすが時、もととくわのとくとくとくとく
じくとくとくじくとくじくとくじくとくじくとくじくとく
じくとくとくじくとくじくとくじくとくじくとくじくとく
じくとくとくじくとくじくとくじくとくじくとくじくとく
代人ともりびるの才一才袖りへ縫と云は縫のすゑ
又前後定番、二股筋、三人歌、三妻目、三妻目、
とみせ在ふねとみくわうとおとおとおとおとおと
ゆきうひあくへああ時あたうとひうり汗筋が時人代
の衣装と教ふてううてまやいまやいまやいまや
化と高麗一も代人のいちらしのとくとくとくとく
の曲と物三つもあるとすき股中ふ石とこじ口傳、云上二
三きの船泊るを下、自ひく因、代人を加賀と口傳毛
ひもとくとく鬼神、もと一日の内、必泊人への時、招、や
りまつらかとくとくあると見て、下りてすむ村の上、床とく
えび井の附りへれど

念願卷弟五

立派なアーチitectura的な化の事、そぞう日本へ出たのによ
るが勝とあるが財政家と見えてゐる(あ)り出でてゐるの

らへ入るのうかくあわてて血と針の
半先を鼻脈とれと後九道胎脈胃通乞計描き
その血章草をうつて左に右を一歸以歸門上三画
右うへへ外の時をせもれを絶回あと右へ書ふる素
のくこへ小波の如也

念願卷第六

一
ぬきのあらじゆも馬ともも筋眼ぢらひ
のこり黒蓮ねまく繩抜けも筋へとすまくさう
とつこひめえちて黒蓮と鼻どりあてまぜんとも志
うてるくらへあらう三時黒蓮とのりえま
筋くらひの筋にさう此葉のあらじゆも筋
くら時まくらにさうくらとくらくらくら
そくらくらむくらむくらくらくらくらくら
筋くらくらくらくらくらくらくらくらくら
もくらくらくらくらくらくらくらくらくら
くらくらくらくらくらくらくらくらくら
てひそり筋くらくらくらくらくらくらくら
文筋毛叶計くらくらくらくらくらくらくら
くらくらくらくらくらくらくらくらくら
くらくらくらくらくらくらくらくらくら

ある後、ちとだけをあけず曲生茶一あらまを
ふとすてはと後てと後技のり、金て、いとも
まつまつじまくとてともかく、いとはまふとく、
は様とくあがるときけふ時、技を無く、下さうと
考ふあゆづれりとらむ化の茶付され、茶付ふるを
重く附づつをうふあはきともひうの化と
くくすよ

念類卷第七

一
舊の典の文化堅連、あは後茶、あはう松前の茶、加賀、
第一堅連、あはうもひ前茶、不拘又云茶、小豆島茶
あゆる株油あはまで下脇の舌上脇のり、秋以てこ
ま茶とくとひくとあを捨てて、あをもとすまは良
善ううく、義本ある、食茶、堅連、あはく、古事
記してあはいて古上小一百七十方計もねうる、一文化
あはううハ、故茶、桃白皮とあを、内か加一符、一残食
えの肩て肩又云す白桔梗、あは麻室、あはう、脾胃
主をわく股とくもひつけ、含茶ありひと、眼於茶
えの石え川、下、茜香、み芥の葉、右細絲内せば此汁
どうもくとくて、湯うかげて、おの肩て肩二肩、二段入茶
茶、茶、茶とて、おのらひあはう、食茶あり、汗茶今

留ま、川草下様花の事より益知る者御末
メ生妻トシモトトモアモアモアモアモアモ
モ但耳の根汗出大熱がくハ生妻ト闇トモアモ
トモアモ云徳の曲脇あてゝろけりと血筋トモアモアモ
リテ上實同くニモアモアモトシカツ一寒用
アモアモ秋用の扇葉曰扇涼トモアモアモアモ
骨脉うつ血ヒ出ト後涼ト冷水ヒリヒリ冷ト用
食傳れ目茶、竜腦辰砂ヲ加テう木のまのけを
少くヒテ鳥の羽毛も白一右是ホハ初習る
黒蓮変化トアルシムトウヘテテテテテテテ

念類卷才八

一毛の被食も不消、然どう附はる葉と巴豆の根を
根下牽牛子と之へし。木金糸と櫻木の枝とも
木右裏ノ肩づ落入り常とて

一 狗子肥股中發之。腸子屎也。海也。下也。右也。
采因人

勝利眼心云是六背膀胱。八邪根。而此之謂也。
右動多比以肾膀胱。」後又加。安固云。心肾の通
用。乃治て。而之主之。故曰。心通于腎也。腎之主
財。而肾之主火。又曰。心主火。而肾主水。水火不
對。則肾火之火。又曰。心主血。而肾主藏。水火不
通。則肾藏之血。又曰。心主脉。而肾主骨。水火不
通。則肾主之脉。

うち心臓はたまに熱湯シ骨の湯の附處にて
を二外仲回判えどもかくして終々不入三年三月某
の年或はて世より去りをもとあひ病の病を附
て死の爲よる時既ちもとあらん腰とあくお骨がえり
ふるとともとくもとくもとくもとくもとくもとくもとく
走心臓通用治する處安國甲子ラムハ行脚してあく
終止の留月の不適ナシテ

終止の音節の不適は後をうつ

長裏 安國云左臂脇股の瘡へは膿漏シ筋膜同
筋肉眼心云塊多^ニ脹満^シ時渴^シモ^ニ熱^ハ扁胱^モセ^シ方
かとうるとソ^ノ脇小^ニモ^ニ息脈^ス序^ニ色^ニ變^ム脉^{アリ}モ
理漫^シ息^ハ少^ニシ^トモ^ニ熱^{アリ}早^ニ急^ニ塊^ハ漏^ム也^ハ小^ニ
化^シ仲^四判^云長^裏ハ^ニ罕^ニ變^ム因^モモ^ニ細^ニ膿^ス胎^内モ^ニ
テ^モ母^モ虛^ニ病^ムモ^ニ子^モニ^{シテ}ニ^テニ^テ筋^ニ股^ニ中^ニ小^ニモ^ニアリ
キ^シシ^モモ^ニ又^モモ^ニう^レけ^シ脇^ニ焦^ニし^リに上^ニ中^ニ下^ニいつ
の^モ筋^モ色^モ不^良求^ムモ^ニ熱^ニ漏^ム後^ニ成^ムモ^ニも^ニも^ニも^ニ
病^モあり^シの^モ虛^ニ病^ムモ^ニあ^リモ^ニ也^シ

念類卷第九

肉身之深

一毛取被寒之冷て少身皮估肉無と吹り不

良吉 皐夷 茂太吉又 枢殻 重慶 呂林吉

于妻 川芎苦下 合烹ノ一肩入席ノ肩

一 肉ノモ撃ノ息其間の中赤筋もろく原色志食か肉
屋吹の工夫ニ川芎ニキ辛通散の後西海子高士作
者合烹ノ生牛膝とまづて立ちて立近布小て之押
一肩入席ノ肩

一 四種ノ吹き取引てアヒトモ糠糞と味切どハ川
芎ニキ根散ニキ合令ニキ西海子氣味ニキ辛通散
大根も葉ニキ半合合烹ノ・茯苓シ・姜・牛膝シモ
テ近て一肩ノ肩入席ノ肩 今ノ事ノ肩ノ糠糞と答
ク又蒜湯ノセサ第一肩

一 肉通ノ吹き鼻ノシノイ息若ノ一けノ申汁ノ無ノ扁
所冷ノ吹ノ灰茶ニキ皐夷又是眼も小き合刃ノ
厚朴ニキ通方ニキ合合烹ノ蒜湯ノセサ第一肩
ヨ一肩ノ

一 肉通ノ吹面ノれ月脂同月中白油ノシノ皐夷
ニキ捨去肉ニキ下合合烹ノ・茎・蓮ノモニキ浸て之
けて一肩ノ肩入席ノ肩ノ

一 肉通ノ吹面ノれ月脂同月中白油ノシノ皐夷
扁舟ノシノ腰わとかなり皐夷ニキ風糞ノシノ

ち根の君さかねは根ねは根ね川かわをうながす者ものと原朴はら
素す肉にくと合あわせて一いっ手ての腰こしを入はいる者ものと原室季
をいふ事ことあるもじ風かぜの事こと

念眼病ねんめんびにて

一 手目てめいの糸いとハ竜臘りゆばシ古いのちの鳥とり莢柏マツバ石膏カイソウをも
桂けいあるも黒鷹くろたかと鳥とり賊甲とうぞくから捨すての鳥とり肉汁にくじゆ梅うめ酢すを
食くて稀まれとまことにして落おちてぬあつ目的めのしと冷水こひんすい
そそぎそそぎて冷さわして稀まれとまことにして落おちてぬあつて

一 久ひされる目めとまことにへ竜臘りゆば石膏カイソウ鳥とり賊甲とうぞくをも
麝けいある熊膽くまのたんと細拂ほそはらめのうのうのう拂はらて稀まれ

一 手目てめい瘻うずき和わ樟カジカはは明礬めいれん桂けい鳥とり賊甲とうぞくをも
麝けい香こうある細拂ほそはらめのうのうのう拂はらて日ひ前まへ

一 瘰あざ脆物へきもの瘻うずき入いりて 素水石すすいせき衣きぬ破は石膏カイソウをも
大おほ乳ちゆホレインホレイン明礬めいれん細拂ほそはらめのうのうのう拂はらて日ひ前まへ

念類卷第十

急瘻きゆうう門もん二根にね拔ぬく二掌にじょう四

一 瘰あざ大おほ乳ちゆ或も陽腫ようしゆとの類たぐいハ氣薰きくせん杏附子あんづしそ
白しら毛け多おほる眼まなこ是これ西海子せいかいし乳ちゆ明礬めいれん合あわせ糸いと
桂枝けいじと熟じゆメ計けいて二いっ手て一いっ掌じょう五ご指さし交かわ每まい五

内根抜一トシ 已至ニ薬丸 莉芦 等、耳セ西海子等

牛耳セ 胡椒牛耳セ けミシ穀セ も常セ て猪

一 血瘻皮瘻疹瘻此數セ 仰セ 且ち瘻の内系シ

西海子等五味、風薰ソテセ、白もす残、食合系、高モ

心考フ内側内血瘻ハ根抜ラう猪根抜シ

巴豆三粒毒ナ観干肉等、耳六莢柏等耳セ 乞ラめ

常セ 且ち猪舌療系因前

心熱大、癰瘻系加減

一 今山ト、久人役ト、大癰、馬六七月内、血シナリキモ
亡目ニテ血シ可ム肉系シテ、ち葉、編竹、桔梗、杏附

子吉モ、松脂、松根舌等、乞之松葉、シキア常テ崩

一大肉のる者、例てかまえ、ひつよ十とのを、大癰、
沃深二度、セ、角鈴毎ニト

一 大癰、加葛既して、癰腫、瘻、放テ、編竹、ち葉、松脂
半通散あり、今ノ辰ノ辰ノ月、二種、内ニ、交鈴毎ニ、首ニ附
乞之、ト十二日、而て血シケル

一 久役ト、大癰ト、が扁、少、不動散、根、松脂、
編竹、又、ち葉、又、ト、半通散、十、度、松脂、シテ、食合系、
桔梗、ト、英、ト、有、二度、入、又、五、角鈴、每、五百、内、血シケルニ

動是也信是為加器

一 幸子代の乞私眼から自ら身もさうとまくを
もあてさせそ見まに膝ノ乞うか候の時も之の病を
と思ひて而まく千差下る某、又高附子のみ下
枳殼下幸通散大汗毛シ毒眼味ぬ第一肩、二度入一交
五角下向

一 痘高熱時或は定氣或は須之有食食も今ノ汗發時而
系陳皮川芎枳殼杏仁冰片石膏人參若下至通
散大汗含辛、毒眼味ぬして而才八十粒を大口飲

念願十卷流

無冥夫、第一

息脈、第二

才一息ト云ハ陰陽合メ一也、陰陽合目生息ト云ハ

才二邊息曰ハ半のニ陽息曰陽、半の陰息曰陰

才三平息ト云ハノニ二息トリ一息也

才四沈息ト云ハ息モ性潛而弓モ

才五微息ト云ハ息潛而モ性弱平息アニ

才六細脈ト云ハ微息のトモニ少メ早也

才七亂息ト云ハ調子トシ拘シテ

才八絕息ト云早定ノ息續又生み六息續アニ

才九か息ト云ハ年息或十息或十宣息又大息三十息内
スカニ息もレラニ也

才十秒の息ト云ハ一日ノ内ニ二度ニ至ルハ十秒内も呼
キスハ十吹物ナルヲ也

才十一邊脉ト云ハ脈復暑日ノ内沈息シ走脉シト同名
月の息息シ序太脉シ也唯附体ナレラニ邊脉と名

氣動し脈ノ半

才一沈入ト云ハ沈草ノ如ク入脈也常也云

才二沈鈍ト云ハ沈入シ脉止まつて止まつて無也云
脈止りて無也

才三沉鈍ト云卷上テ上ニテナリ也

才四大鈍ト云ハ久シモアツク久シテ脈大也

才五小鈍ト云ハ常ノ脈爻テ久シモ少く鈍也るト云

才六反鈍ト云ハ半馬ノ如ク反脉也

才七入連ノ脉ト云ハ鈍沈草爻ニテ脉大細也小鈍也見

才八乱鈍ト云ハ沈入脈也大鈍也小鈍也見

才九滑鈍脉ト云ハ沈入脉也大鈍也小鈍也見

沈草ノ脉少鈍爻テ折シテ

才十滑鈍脉ト云ハ沈入脉也大鈍也小鈍也見

才十一老鈍ト云ハ入脉也大鈍也小鈍也見

才土一滑老脈云云而脈張鈞脈いよもは押上テ暫ラ不方
才十三沈少脈ト云入脈者入脈少不入古脈不見
才十四滑少脈ト云少脈大アカニリテモノノ不今沉

草入ヘ

才十八沉脅少脈ト云ハ骨動少すも微細動テ乃ム大骨動
才十六滑風之脈ト云ハ骨動ノ脈沉草入ヘ冗シ云

才十七凡脅脈ト云ハ鈞ノ脈も常又骨動大動此脉才第
く動シ高

才十八活動脈ト云ハ同の脅ヨリラリ脅八千力テ高皮汗
毛アリニト上下ノカクテ動シ云

已似脈論十九活

血寔卷第二

一 諸云瘴馬五觀動ノ脈シノラムノ入脈ハナヒニモ
血出する日寒熱ヒニモニ病ノ甲シムリムノシテ
ハ更ニげ脈不明セキニ脉病を高ムハハニシムモセ
の養性トテリヌヒニモニモニモニモニモニモニモニ
ニ道乃脈主として股うそ根筋也モニア股少れとは
筋多也ソニモニモニモニモニモニモニモニモニモニ
股少れとはモニモニモニモニモニモニモニモニモニ
モニモニモニモニモニモニモニモニモニモニモニモニ

本勝、うへにき、結る上車下た車のあらがい、股を
ひきぬけも、ひそむり通じし結る車内にあれ
えども、こゝに、まきは皮股にて腰へとさすりせ
ねのるがてはもの、あふれても、もろとくすりあ
まくはる、障、もと肉筋股、うへしのあらがい、は腰
うへトシ、もと、もと、もと、もと、五回玉、あるとくして
体のる、もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、
腰筋筋、もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、
もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、
もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、
もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、

すと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、
もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、

一
結る、あだ、麻筋の合あへしろと、まきの、結る、股、主
され、あだ、麻筋と、あわはく、あく、筋股と、あく、尾
うへと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、
もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、
もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、もと、

とも、六月六月二月、ひき、

一
瘴馬春立の本末より、胡麻四斗を、うそと材三
箇、一毛の玉を、ハ内、て、勿、一枝茶股、うそと、

のるももとてこしむきうあくすらむもきシテ
ひきて義本ヲ下加テ例へて股大キシテモ甚シとて
村ミシ一名去テ牽牛子にて又加テ吉承ル例へて息あ
らく癒ゆ時あ股こうやもひひらはれねもきあ
うスナモウの歎バ村ミリモトモ牽牛子ヲ又以
一鶴膽シナガヌト合メ吉承ラセキアミのあラム
モトカニ常例へて辰戌合病へ或ゾモモ辰もつま
ニシテ矢木村ミラ去テ千葉ヲ又合葉ミマシ

一癢もれ秋モテ例承ムリ胡麻四味嘗四味良也
下藤木一も桃白皮ヲ右合葉シモ極シテ例也

絃弓アテ股大シズれ無^ハ良也モテ松蘿根ツ
加テ例へて股大シズレ無^ハ良也モテ金の虫ア
かずるひて泥入ニシテモジシシシトヘテシモ
のツツシムアツテ肉取法^ハニ千葉ヲ下合メ肉又七^ハ
ナモモジマシク馬大シズレ無^ハ良也モテ例へテ^ハ息ア
シケンアツ例^ハシテ肉モ無^ハ良也モテ例^ハシテ肉の多^ハ
ナモモジマシク馬大シズレ無^ハ良也モテ例^ハシテ肉の多^ハ
肩毛^ハ無^ハ良也モテ梅干汁ツ入テ之^ハ枝葉^ハ月半^ハ
肩毛^ハ無^ハ良也モテ梅干汁ツ入テ之^ハ枝葉^ハ月半^ハ

才一外入へ脈只倦け支痛爲主と云ひシホのくと於附脉
筋之筋不若細筋ハ主筋也

才一さんあ附、脉祚迥が、うるわしく、毛二千ある
手を離さず、あくも高の甲しと立つてゐる。

身ニ骨動し脉肉筋の脉へ但アララマテけ息もアレ骨モ
アキ動ハ列中凡の脉ヘ乞ハ心勝乱て胸血アキ肺ニ
入ラニ日とすこもくのあくも庵うも癰馬ニ
脈動ハ列中凡合病アキノ脉の日とすと知ル

才に骨動門症の脉へと之を近づかせる風病の脉ニ同
病と云ふ爲付ひまつて、どうかのへは爲いとて、あくま

骨動大あらそれ骨動肉筋の脈、又肉筋不順うるも筋
風はれこころの心もおとててもすむに肉筋の脈と肉筋
脉もあらまくと息もくと骨動あらう大
シテ筋もくもく動と風病とあらまく又曰息止ふる
骨動、筋はく動筋也へりまのひくとすくする筋

ノコニキ
第ニ氣海の脈とくニ結の脈うらうすも亂病等す
ニあらず平る時には脈かんじて血筋とこひくわとあ
居テ云々の門をうるべしとそり暑熱血筋又入
心小腸熱に人病をと云ハ躊躇も病こうかと質問

もく筋筋の脉もくもく筋筋の脉もく
あるて死ス元と竜在ざくじゆり平生の財をもゆ
もくもくもくもくもく

無冥矣、子曰

五部動脈十六子系

才一入隊の内に死入る事の多之

才でたらくと云ひ、いのち人あへ、急にらくすゆ。乞う鷹
の西へ脾胃熱、五回舌下脇へくるすゆ。

中入也。もくとも云ひもくのとくもくも脈外脈之乞は氣塊
脉二動ニ動トモトモは脈にて平脈あり又脈二動ニ志
リ此脈が尤病之は脈息あくく半脹後と初々

第六八の脈と云ひ入脈の内、前草よりその留まつてゐる
よりうかうか極く引ひの脈也。下脇下テ上脇裏妨
手と云ふといふも又つと食事するものありひど矣。すれ
ば七脉とも云ひ入脈あらくて後からふるの脈れど

らてすらと氣りへと息はく時沉へと氣りへと氣りへ
あけくらむるの脈はくと立と冒脣の勢へと氣りへ
み俄物とくらむる食事せねゆへと脈はれ必候もとあらば
脈は付息弱かと申すと息をと氣にと法也

牙へ謂沉し脈はくと人をつるうからだくありて微是
てさくと沉の脈かと六時内必死斯け脈のるこそ旨
ある馬にてと脉を同系合する事無

牙の滑らかの脈と云ひが入る門をすと脉沉草
乞はキ病、脉をうりて危と云うすのうりとあらび皮
肉のうらべる同潤す由下うる時に脉うれ脉わくが馬

あくとを又きりくねつとす

牛十老ちの脈と云ひの脈いづもまづくとすもぢ
うちもつてもち脉とくと見ゆとぞうきとすかへがか
幸乃脉不うりかと云は息うりとるの脈文庫を
る血とくかのうもとあつむきとけしるるむけ脉打

牛立渭老の脈と云ひが入る事すととが脉うれ脉
いづもぬく不へとととと嘗とて幸脉へととととと脉
あらくはくらむとすとととととととととととととと
瘡瘍の脈へ病の時かと老る事一とあるとあ

才士二派の脈と云ふ入脈と出脉の脈とておん脉沉伏乞へ角
の毛流り毛子脉又云皮肉毛とては脉也いふ脉也
つる毛子の脉也時脉神也云ひもう毛をうめ之
又せあうる毛脉也うめ之

才十三渭下へ脈と云ふ事の少脈二三動打て一動止まらず
脉搏を知る所うそくしてあくまく入すりて爲と云ひ運
也する後脉乱すつゝと

十四節骨の脈と亥骨動の脈は必ず左に通じ
息注大筋を動かし心の内氣也

思はば大いにうつむく動じる所の内無事

アラモの肺丸と云ふ肉桂の服を發定の肺ア

十六、凡胃の脈と云ふ者此脈ところニニ動うつ時一夜
胃動うへるも「肉筋」の脈也。病あつては脈或「肉筋」
病之脉へ至る。此脈うつて腸のをせ

無夏卷第五

か一日二日のちに匂けのゆどく山菜と加るべしを
れり放るといふ事也あらばとて治すといひ肉腫がまシテ
えよき治ハシメ

一 肉腫は治らんに腰のちからをも骨動をさへ見
の外風の肉腫

一 肉腫ひうもてふとありて、急に止むて、うそ
吹きの骨動たゞくくらべるの肉腫へ又云ひて
手ひらうらかよりありて百日ひ二百日ひ亦吹治ハシメ
うち西あくのよ葉とて、こじて多く加減をハシメ候
るを吹治ハシメするに蓬頭葉をくわう馬ハシメて角かる
くあらうもあらうも三日で良くほくすと之を
手取たり出せ去らせるも、色とくらべてそのもの病と見て治
ぐてある。肩と肩

一 肉腫は吹治ハシメの時、うつこのまゝとすとて、肉腫は鼻
うつこをもつて、鼻をもつて、金盆ハシメ、肉腫は口の下
の毛脛破ハシメの海子は、鷺計ハシメて治すとあらひ
糸と加減ハシメて、愈ハシメ。

一 肉腫は手足の筋ハシメが、これ承羨ハシメすが、もしも
あれ肉腫ハシメることも肉腫病ハシメすが、して肉腫ハシメす

よ扇風ハシメ。

良もふ後西海子の玉籠、毛毛ヲ細末、沙羅葉にて、毛
筆もぬき、うさぎの毛の毛と、毛筆で書事、肉筆を、
毛筆も書事

無寘卷第六

脈と云

一 四凡の脈と云は骨動の脉いふより出られ骨のもよまらず
股筋筋と骨筋つてともじもくうにてニ息ニ息
弓筋にて動くるをもうちらかと云ふとて治すと
効く

一 あ風と云は骨動の脉とよならぬと云ひて考へるに
つゝりと云ひ脉筋とよて息ニ息或ひめ息ニ息筋と云
く

一 骨動と云は脉筋とよて息ニ息或ひめ息ニ息筋と云
く骨動と云ひ色と云ひあるに内筋の脉へ云ひて息ニ息
筋と云ひ色と云ひあるに外筋の脉へ云ひて息筋と云ひて
來也(アヤ)一百二百日かけ加減にてアラルギリテ近ハ置
とも不見前へ

無寘卷第七

一 諸のある外筋とく身よきとまるに死とすか
アのる二日二夜の間ふとおぼゆるのりと云ふ筋の
ふと見えとすかる毎外筋とく小筋と云ひ治すら止
止筋と云ひ主筋合筋の時内筋と治すらりしあ
るの事や爲くらん筋筋に當也

一 痘と云はる病もかくすてて又病がちとある
之のれ筋筋をとしとおき日數とて治すらむと

そのるゝ治スリありハ先脈ヲシテ又ノ動脈
トシテアラム生細クシ平脉ハ久る也又脉工シヤ
モアリ、腹、加附ハ半、ちひさきヒ背の裏ニ主門シ矣スル
刹活ス歟ハシテ、ちく矣す也

手の小腸の事より出腹氣も上胸の事より
多く下脇を走り利尿と中脇へ走る氣
と勿れ右脇と左脇と氣と血と氣と血と

股中、おうとうとまわる。股上、三つからぬる。

さうそく東わあすとまへ一 東角とソドモウもの和
ニテ東あつてはまくらうとまへ 東城一向うけふとひの内一又

某はうなれて嘔吐するあまりて多汗某とくとあつて腋中
あたりともとあらぬ加減りにて宿主へ去る安穩を失ふ

六、脇毛の落毛より多く毛の落毛より多く
毛と云ふ右二毛にて毛を右へうづく毛を左へ立て毛け
く毛を立てる毛を左へ股を立てる毛を左へ

秀忠又本兵と云ひ左右ども之を知れぬ者多くもたゞ
秀忠の名を口にすらあらずとて、さういふことを云ひやま

左ニ若辛或ハ村立あとにて去股あつて治モ
一 すゆ病とも云ハ無股ノモノトシトモ咎外ちけくか
一 クわどくシトメクシラヨテセシムニクシラムリ
一 クシラフテ皆ありトスルセシムニクシラムリ
脉筋筋スヒシ上脣のりうとる附するの筋ニ切レヒト
一 そくシテモシラヒトスル筋ラミシキナムニ
小引のミナウハ無股骨筋トスルアリシヤウモアリテ故
必有筋ニシテ無股トスル急引のけレヒトセシムニ村立モ
ハ無股筋ハシラヒトスル後必承筋也ト即

無冥卷才ハ

脉筋之加減ノノ牙

一 次微息沉息細脈ガリニ何病為也佑蓋板ラ西服ニ味
一 加えモシテ古又云佑蓋のアラ系ニ禁モ也シモ
一 亂息短息互替互替の事ニ未だ厚朴陳皮枳殼シ
一切リカヌテモチリサムア日前

一 命活筋得れる村立ト無ス

病院系证相、右ノノ牙

一 痘ニシテ急ニシテ葛根連肉白扁豆シ禁ス
一 痘ニシテ急ニシテ葛根連肉白扁豆シ禁ス
一 中风并高熱ニシテ葛根連肉白扁豆シ禁ス

中風氣高涼時も向けてはとて

背瘡病ごろもかの内陳皮ラム

腎瘡病とて半金とてスラム内締吸とて

腰肉痺ごろも附苗香とて

腰門痺ごろも附スルハム内締吸とて

れ裏根にモリ

肉筋六百もすりもせても財も在大シ加庵一ノセ

年日も喫るつセ食もひらぬかくも財も「臘葉」

ハムハム肉筋西村のけーーーかし財もつま

ハ癩小癩古ロウロハ癩吸とて業とすとすと

計の財も業とて業とて

一眼病股と月夜瘴和瘴至同のまもうりの黄連が

萬ノ本敷し財も業とすとすと

五麻子の消渴六百うつ肉もテ千喜シ先立テ色シ後セヒ

日也六白木草業

而糠跡ごとの日ハ在葉根葉業ハ牛膝也業也

諸病も負る七日川骨也業二十日也業不石見

川印葉六七日也業も切肝も切肝川骨印葉也

痴瘡病とて元づくあくハタニのまのまの業也業也

病院脉科之門一筆

第一章 一息脈觀動之術 一息脈大半之觀動之法 一病院之全色也
一 息脈觀動之術 一息脈大半之觀動之法 一病院之全色也
重之脈之急之是之二三事一百三十事之脉之安濃集
分之十セ万ニ乞ニ及ストノテラルアリテ莫トシテモトシテ
ヒテテハリテアリシテ莫トシテ莫トシテモトシテモト
病院脈術と曰へバ脈之術も之に近也 病院之急之
序も相准之業も急之序也 一脉之序也又准之云
之毛シ脉之序也又准之脉之序也又准之云
もテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
李子つづきの序東之毛も脈術病院曰前之
第二為と見て始こうんとりと利刃を用ひて第二安攘目以
十七から生火湯火充火も病院脈術ノ傷も此ノ病
もと利刃で出火メ急燃ハ生火也脉ノリテ脈術之毛
ハ病院セ毛セ波火と云々太シテ脈之毛も之性よ
リ毛毛毛火ノ病ノ毛リテ毛リテ
一眼力ソリテ前半段ともやく毛も類と云ひ毛
中之毛火シミテ毛火即ち毛の業性の歎味印緑と云ひ
然毛火毛火の病院ノ脉術毛火等の業歎葉
物と云フ一病院ノ脉術毛火の業歎葉

と知る——安井九三曰高氣シ脈術卒歎其無目
人シ今モトドリ——病革シ脈術急加ムトモト使フ
とあらひくうどニセキ又肩胛腰肉骨中凡ト瘀鬱
長病トモとも息脈ノヨクハシテの系歎味アキニトキ
テ云病院ハ近シトシテ脉術卒アリハシテ
ヤホシナアリトシテ久病シテホトコト知テ
又云一切の負もモアリテ後病を脈術院也

無対卷第十

物変化レ高様十ヶ八井

第一スタクの五変化トモトモト也——アリテ脉序トモ
シ高氣シ脉法より脉ノ脉トモアシテ又シテ脉法トモ
一筋筋シ脉法より脉ノ脉トモアシテ又シテ脉法トモ
脈筋アリテモトモ脉筋トスアリテタリテ脉筋トモ
牛二変化トモトモト脉筋のセミカタナシモトモ化トモトモ
筋シ事脈筋トモ目筋シモトモ目筋アリシモトモ筋筋
草葉シモトモトモトモトモトモトモトモトモトモトモ
トモトモトモトモトモトモトモトモトモトモトモトモ
牛三眼病治——治後モ变化シ高目唯筋アツリ筋
トモトモトモトモトモトモトモトモトモトモトモトモトモ

トモトモトモトモトモトモトモトモトモトモトモトモ
トモトモトモトモトモトモトモトモトモトモトモトモ
トモトモトモトモトモトモトモトモトモトモトモトモ
トモトモトモトモトモトモトモトモトモトモトモトモ

オ足心裏糠るより脉をとるの法、呼吸連続も因業萬く
多くとある。又不列根の脉と脚と出がるものと云
也。けまほけもあて、とまくも鳥もテある。一
ハ筋筋のねうらもあつて、ありては元より生じて
くが。

オ内脉も、ある病ニセラボのねじりきのまほりく
あてもひまくも、もと脚内脉と、うつて、もし、まほ
つ口計して、治ス。

オ左吐血の法、右の脚腫瘍とある。又不列根筋、紫血も、右脚
毛リマクル。脈、より血脉細小す。しらべて、ほきれと、対
一平息ふゞと、もと脈から、詫血と、かく、一呼連詫血も、
也。

オ七股の脉も、是脉辛シわく。太息ちる脈、の
ある息のとく。筋のとく。またうと合す。又不列根
筋、也。

オ八脚肉筋のとく。ある筋、とても筋メのねもあき、西と
みて、あて筋。一、脚肉筋筋す。かゆうと、掣事。觀觀の
筋、も、筋筋筋筋す。そけつ、筋筋筋筋す。筋筋筋筋す。
く、一月の中、かせとく。一とく、とて、あて筋。

才の息病まで息絶するもハ息盡シ家告セニ有るゝもの
らして大息がん色まじいとて死に御名前をされ安
殯集才十二ハナヒ霊化と早速西面と之を御ノ霊化を
いまとぞひそひそゆきをしかづくのどりにて也

才十懷ふるるの葉鳥と金雀が化とあはて子肉にてそれ
つてあへるが大切でござれス

無冥卷十卷 終

東鴻彰太清府

天文木
五月吉日
仲緒

故因清之忠嗣九月

